

京都仏師・畑次郎右衛門による錐点技法利用についての研究

—龍澤山善寶寺五百羅漢像を中心に—

佐藤 真依（東北芸術工科大学大学院）

1. 研究概要

本研究では、山形県鶴岡市の寺院・龍澤山善寶寺所蔵の木造五百羅漢像（以下、善寶寺像）[図1]の頭部に散見される「錐点（きりてん）」と呼ばれる複数の小穴に着目し、その意味、用法等について考察した。善寶寺像をはじめとする複数の作例を対象に、頭部錐点の有無や配置の規則性について調査研究を行い、京都仏師・畑次郎右衛門を中心とした仏師集団における、群像彫刻制作時の錐点の利用の実態について明らかにすることを目的とした。本研究では、特に、これまで詳細の明らかになっていない頭部側面の錐点に着目した研究を行った。

2. 研究方法

（1）錐点について

錐点とは、仏像の制作工程の初期段階において、木材の正中線上など、彫刻の基準点となる位置に錐穴を開け、彫り進めても消えない目印として利用する技法のことである。下図の固定や、目鼻などの面部パーツの位置を固定する目的で使用される例がある¹。また、仏師の間には「造像比例法」と呼ばれる仏像の身体比例を定めた法則が伝わっており²、錐点はその目印としても使用される。

（2）善寶寺像について

善寶寺像については、これまでの調査から、京都仏師・畑次郎右衛門を中心とした仏師集団によって、江戸時代後期に制作されたことが判明している³。また、X線透過撮影により、頭部の錐点を確認されている[図2]。善寶寺像は、頭部と体部が別材で制作されており、錐点を確認されているのは頭部のみである。

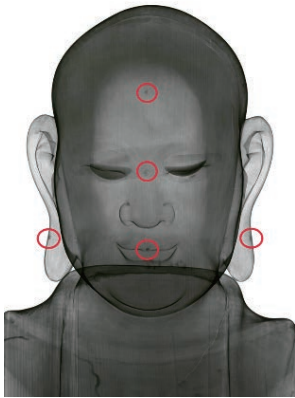
善寶寺像は一組の群像であることから、当時盛んであった分業により制作に多くの人が関わりながらも、大きさや造形には統一感を持たせる必要があったと考えられ、その目印として錐点を活用していたと推測できる。



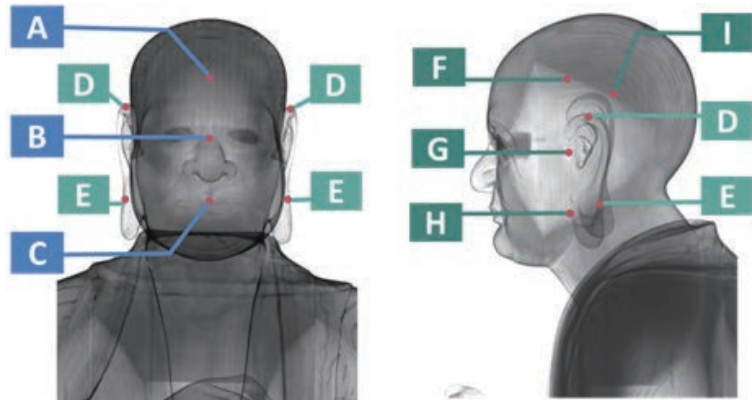
〔図1〕 善寶寺像堂内安置状況

-
- 1 山崎隆之「仏像の造像比例法—錐点について」『愛知県立芸術大学研究紀要 16』愛知県立芸術大学、1986年、23-44頁
 - 2 山崎隆之「仏像の造像比例法—高村光雲「仏師木寄法」について」『愛知県立芸術大学研究紀要 15』愛知県立芸術大学、1985年、1-26頁
 - 3 柿田喜則・笹岡直美・井戸博章「善寶寺五百羅漢像保存修復業務 2018年度事業報告」『平成30年度 東北芸術工科大学 文化財保存修復研究センター紀要』東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター、2019年、41-54頁

筆者はこれまでに、善寶寺像の錐点は A ～ I のいずれかの位置に規則的に配置されていること [図 3]、正面の錐点 A,B,C は造像比例法において重要な計測の基準点に配置されていることを明らかにした⁴。しかしながら、頭部側面の錐点の配置に関してや、錐点技法が群像彫刻の制作においてどのような意味を持つのかといった具体的な部分を明らかにするには至っていない。



〔図 2〕 善寶寺像 X 線写真に写った錐点



〔図 3〕 善寶寺像の基本的な錐点配置

3. 研究方法

(1) X 線透過撮影画像を利用した調査

善寶寺像の表面には彩色が施されており、目視観察では錐点の位置が確認できないことから、調査には X 線透過撮影画像を利用した。研究対象像 52 体の錐点の有無と配置を確認した後、各錐点間の距離を計測し、錐点配置の規則性や造像比例法に基づく関係が認められるかどうかを検証した。計測には Adobe Photoshop「ものさしツール」機能を使用した。

また、善寶寺像の風貌には、いくつかの系統が見受けられ、この系統によって、頭部側面の錐点の位置が異なっている可能性が考えられる。そこで、善寶寺像を錐点の有無や位置関係によって分類し、分類ごとに風貌に共通点があるかを探ることで、錐点の配置が、造像時に造形を左右する何らかの目安になっていた可能性について考察した。さらに、分類したグループごとに錐点間隔の計測結果を比較し、差がみられるかどうかを確認した。

(2) 類例調査

像の制作者が同一の場合に錐点配置に共通性があるかを探るため、畑次郎右衛門が制作に関与したとみられる、山形県内の 2 件の作例（高島町・玉龍院所蔵の五百羅漢像 2 体、十六羅漢像 2 体と、三川町・青陽院所蔵の十六羅漢像 3 体）を対象に、類例調査を実施した。

2 件はともに彩色像であるため、善寶寺像と同様に、X 線透過画像をもとに調査を進めた。

各作例の錐点の有無や配置の規則性等を調査し、善寶寺像との比較を行うことで、善寶寺像の錐点と同様の配置が畑の他の作例にも認められるかを確認した。

4 佐藤真依『善寶寺五百羅漢像の頭部錐点についての考察』東北芸術工科大学、2020 年

(3) 模刻制作

善寶寺像の制作時、作業工程において錐点をどのように活用していたか考察を深めるため、善寶寺像1体の頭部の模刻制作を行った。模刻では、頭部の制作段階を①木取りと下図・錐点、②荒彫り、③中彫り、④仕上げの4段階に分け、各段階の工程モデルを制作した。これにより、錐点が主に制作のどの段階で役立てられていたかを考察する手がかりとした。

模刻対象は、頭体の接合が外れており、挿し首部分の底面に「畑」の文字が書かれている、善寶寺像04-05の頭部とした〔図4〕。



〔図4〕 模刻対象 善寶寺像04-05 頭部

模刻制作は、善寶寺像04-05頭部を3Dスキャンして、3Dプリンタを用いて原寸大の樹脂製模型を作製し、手元に置きながら進めた。この樹脂製模型に、X線透過撮影画像から確認した錐点を描き入れ、錐点の位置関係を立体的に可視化することで、表面からでは見えない錐点の位置関係を確認しながら模刻を行った。

4. 結果と考察

(1) 錐点位置の確認と分類

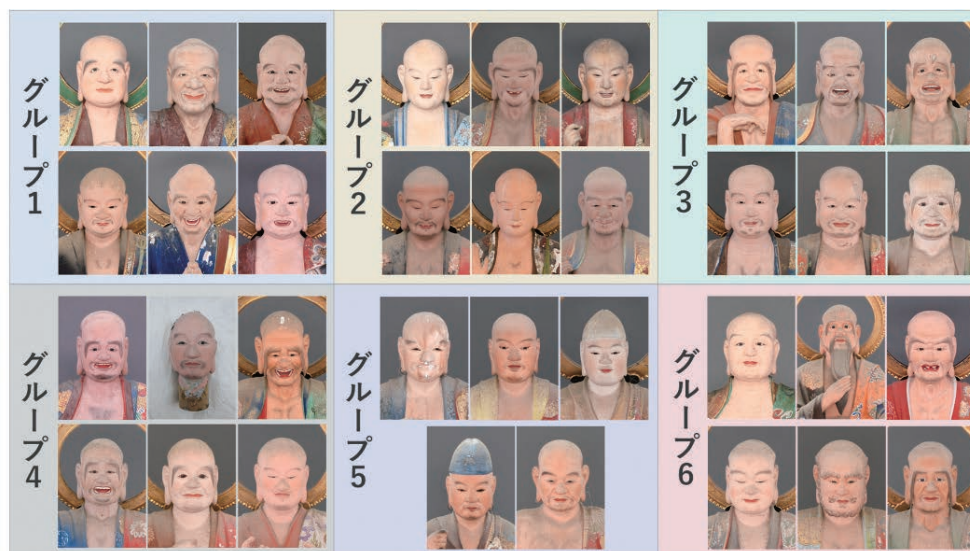
善寶寺像頭部側面の錐点は、D～Iのいずれかの位置に確認でき、配置のルールにはいくつかの法則があるように見受けられた。像の風貌と錐点配置の関係を調べるため、側面のD～Iの6つの点の有無によって善寶寺像52体の分類を行ったところ、〈表1〉に示す6つのグループに分類することができた。

分類の結果、錐点の位置が共通するもの同士は風貌が似ている場合が多かった。加えて、異なる錐点位置をもつグループ同士で風貌を比較した場合に、明確な差がみられるものがあったとわかった〈表2〉。

〈表1〉 善寶寺像の頭部側面の錐点配置による分類

グループ1 F,G,H,Iに錐点	グループ2 D,E,F,(G)に錐点
グループ3 D,F,Hに錐点	グループ4 D,Fに錐点
グループ5 錐点なし	グループ6 1～5にあてはまらない

〈表 2〉 善寶寺像グループ別可視光写真



(2) 錐点間隔の計測

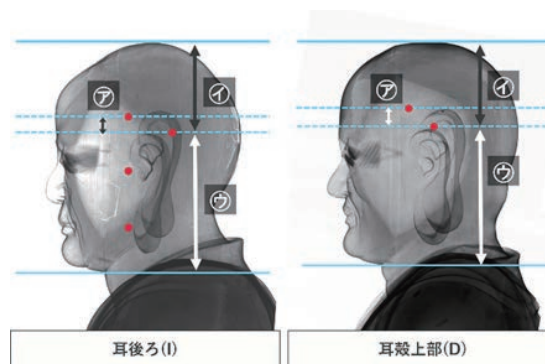
善寶寺像 52 体の、正面・側面それぞれの錐点間隔を計測した結果、計測箇所ごとの結果がそれぞれ近い値になっていた。そのため、善寶寺像では、ある一定の比例法に基づいて錐点が配置されていることが推測できた。

また、前項の分類から、グループ 1 の像には耳後ろ I の点があるが耳殻上部 D の点がない一方、グループ 2,3,4 の像には耳後ろ I の点がなく耳殻上部 D の点があることがわかった。そこで、耳後ろ I と耳殻上部 D の錐点に用いられた造像比例法が異なるかどうか、錐点同士の距離を計測し比較を行った。

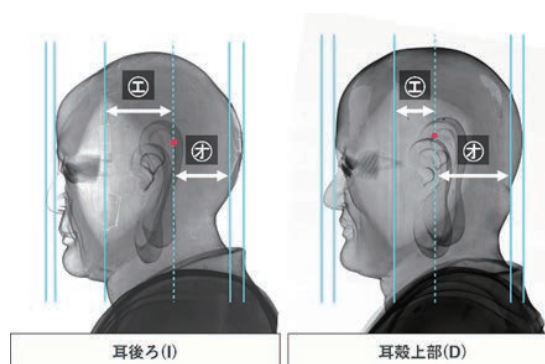
まず、天地方向は、以下の㉗、㉘、㉙の計測結果をそれぞれ比較した [図 5]。

- ㉗ 耳前 F ～ 耳後ろ I または耳殻上部 D
- ㉘ 頭頂 ～ 耳後ろ I または耳殻上部 D
- ㉙ 耳後ろ I または耳殻上部 D ～ 顎

その結果、耳後ろ I に錐点のあるグループと、耳殻上部 D に錐点のあるグループで、天地方向の各箇所の計測値に目立った差がみられないことがわかった。



[図 5] 天地方向の比較箇所



[図 6] 奥行方向の比較箇所

次に奥行方向では、以下の㊥、㊦の計測値の比較を行った [図 6]。

㊥面部矧ぎ目～耳後ろ I または耳殻上部 D

㊦耳後ろ I または耳殻上部 D ～後頭部端

比較の結果から、耳後ろ I に錐点のあるグループ 1 では、㊥面部矧ぎ目～耳後ろ I が㊦耳後ろ I ～後頭部矧ぎ目よりも長いことがわかった。一方で、耳殻上部 D の錐点を有するグループ 2,3,4 は、㊥面部矧ぎ目～耳殻上部 D の計測値が㊦耳殻上部 D ～後頭部矧ぎ目より短かった。

つまり、グループ 1 の像では耳後ろの点が頭部材の中心よりも後頭部側にあるのに対し、グループ 2,3,4 では耳前の点が頭部材の中心よりも面部側にあるということがわかる。

以上のことから、グループ 1 とそれ以外のグループでは、奥行方向の比例法が異なると考えられる。

(3) 類例調査

善寶寺像との比較調査を行った 2 件の作例（玉龍院五百羅漢および十六羅漢像、青陽院十六羅漢像）では、善寶寺像の基本となる錐点配置 A～I のいずれかにあてはまる位置に錐点が確認できた。しかし、頭部側面の錐点については、D～I のうちのどの錐点が残っているかに像によって若干の差がみられ、制作した工房が同一だった場合に錐点配置が共通することを確認することはできなかった。

類例に用いられた頭部側面の比例法に関しては、調査対象とした数が少なかったこともあり、有効な結果は得られなかったが、今後、類例調査の対象を拡大することで、制作者と錐点配置の関係性を証明できる可能性が期待できる。

(4) 模刻制作所見

本項では、模刻制作を通して得た知見を踏まえ、模刻対象である善寶寺像 04-05 の属するグループ 1 の錐点配置の意義について考察を述べる。

まず、正面の両目間の点 B と口の点 C は、面部パーツの高さのバランスを保つための目印として、非常に有効であった。両目間の位置と口の位置は、面部の中でも特に深く彫り込むため、彫るたびに図面が削られて消えてしまう。このとき、正面 A,B,C の錐点があることで、面部パーツの高さを見失わず、造形を保ちながら制作を行うことができた。

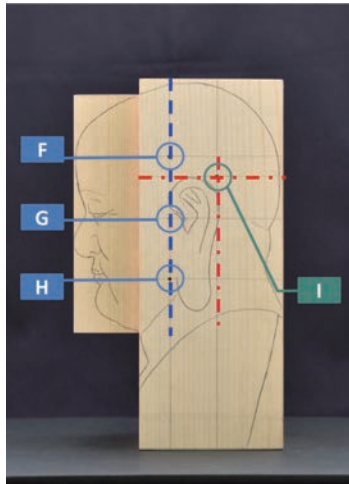
側面の錐点について、側面の錐点は、耳前の 3 点 F,G,H が耳の前側の端にあたる位置に、耳後ろ I の点は、耳の上端と耳の後ろ端からそれぞれ引いた直線が交差する位置に配置されており、これによって耳の幅と高さを固定できる [図 7]。

荒取り以降の作業では、前後左右の図面では表現できない斜め 45 度の面を意識しながら彫り進めていく必要が出てくる。このとき、面部正面に並ぶ 3 点 A,B,C と、側面耳前に並ぶ 3 点 F,G,H の高さがそれぞれ対応することで、斜めから見た際の各パーツの位置関係を把握しやすい利点があった [図 8]。

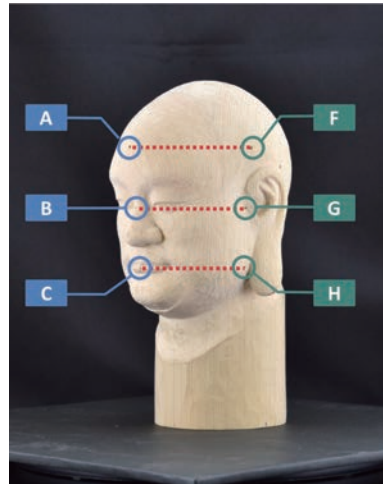
さらに、眉高が額の点 A と両目間の点 B のちょうど中間を目安に配置されていたため、彫りながら眉のおおまかな位置を把握しやすかった。また、側頭部 F から眉尻をつなぐ線を引くと、ここが側頭部で最も左右に張り出す部分にあたる。このように錐点を活用することで、図面では描くことのできない頭部の起伏の目印として利用することができた [図 9]。

また、善寶寺像では、錐点配置をもとにした分類結果が一致する像同士は造形感が近いものが多かったことから、ある程度似た造形のパターンに基づいて制作を進めていたことが推測される。

特に荒彫りの段階では、錐点を目安に鑿を入れるべき部分のおおまかな位置さえ把握できれば、造形感の似た像を量産することが可能であったと考える。これは、短期間に多数の造像を必要とする、群像彫刻を造るうえでの利点であったといえる。



〔図 7〕 耳の位置の固定



〔図 8〕 正面と側面の錐点の高さ



〔図 9〕 図面にはない起伏の目印としての活用

5. 総括

X 線透過撮影画像を利用した調査から、善寶寺像の錐点配置は、大きく 6 つのグループに分類できることが判明した。善寶寺像の分類と風貌には関連性がみられたほか、グループごとに制作者も異なる可能性がある。また、耳後ろ I に錐点のあるグループと、耳殻上部 D に錐点のあるグループでは、異なる比例法が用いられていることがわかった。これらの結果は、善寶寺像の制作に多数の仏師が関わっていたことの裏付けになると考える。

模刻制作からは、各錐点が面部パーツのおおまかな位置の目安になることが確認できた。さらに、複数の錐点の位置関係を活用することで、図面では表現できない頭部の起伏を把握することができた。こうした錐点の配置は、最小限の錐点の数で多くの情報の目印となり、作業上効率のいい配置であった。以上のことから、善寶寺像の制作時には、似た形の像を短期間に数多く制作するために、錐点が重要な役割を担っていたといえる。